

令和7年度 学校評価

■ そう思う ■ どちらかといえば、そう思う ■ どちらかといえば、そう思わない ■ そう思わない ■ わからない

(1) 主体的に考え行動する力を育む教育の推進		考察	
1 豊かな心と健やかな体を育む教育の推進 学校は、豊かな心と健やかな体を育む教育の充実に向けていると思いますか。 (感動・感謝、郷土愛、いのちを大切にすること、こどもの体力向上、基本的な生活習慣など)	2 自ら学びに向かう力を育む教育の推進 学校は、こどもが自分で考え、自分から取り組む授業づくりに取り組んでいると思いますか。	R6・R7を通じ、「豊かな心と健やかな体」では三者共に90%超の肯定的評価を得た。特に保護者の「そう思う」が23%から47%へと倍増し、学校教育目標の浸透が成果として表れている。自ら学ぶ姿勢も高く評価されている。教育目標の共通理解と主体的な学びの土台作りにつながったことは成果として挙げられる。ICTの活用をさらに日常化させ、児童が自律的に課題に取り組めるような「目の輝く授業づくり」を探究し続けることを模索していく必要がある。	
(1) 主体的に考え行動する力を育む教育の推進			
3 社会の形成や持続的発展に主体的に貢献する力を育む教育の推進 学校は、学校生活や地域社会をよりよくするために考えたり、行動したりすることの育成に、取り組んでいると思いますか。(児童会・生徒会活動、学校のきまり見直し、地域のよさを伝えたり課題解決したりする取組、ナイスライ(中学校)など)		R6では地域のよさを伝える取組や学級会活動を積極的に行ったが、児童の評価が70%を切るなど課題があった。R7では数値が向上し、意識化が進んできた。地域を招いたワークショップや校則見直し等、主体性を発揮する場の設定を行ってきたことは成果と考えられるが、総合的な学習の時間のカリキュラムを地域に特化したものへ見直ししたり、自分たちで決めたことを実践・評価するサイクルを学級活動等で日常化したりすることを模索していく必要がある。	
(2) こども一人一人を尊重した教育の推進			
4 5 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実 学校は、こどもが、学習の方法やペースを自分で選んだり決めたりしながら学ぶ授業づくりを行っていると思いますか。			R6では学習ペースを自分で決める個別最適な学びの評価が低め(保護者68%、児童78%)であったがR7では改善が見られる。協働的な学びの評価は三者とも80%超と高い。対話を通じた学び合いの定着とドリルパーク等のICT活用による個別学習の浸透が図られてきているが、単なるツールの活用に留まらず、学習方法を自ら判断し選択する場面を授業内で意図的に設定し、一人一人が主体的に学ぶ質を高める場を増やすことが必要である。
(2) こども一人一人を尊重した教育の推進			
6 特別支援教育をはじめとする多様な教育的ニーズに対応した支援の充実 学校には、こどもが助けを必要とするときに、先生や友達から支えてもらえる温かな雰囲気があると思いますか。	7 インクルーシブ教育の推進 学校では、こどもがそれぞれの違いを認め、お互いを尊重し合って共に学び合っていると思いますか。	温かな雰囲気や支え合いへの評価は三者とも高い水準であるが、R6ではインクルーシブ教育における児童評価のみ80%を切っていた。R7では改善が進み、多様なニーズへの支援体制と互いを尊重する雰囲気作りが図られてきた。こどもたちがそれぞれの違いを認め合い共に学ぶ実感をもっと高めるため、教職員による声かけや支援の質を、より多様性を肯定した具体的な行動変容につなげていく必要がある。	

(3) 最適な教育環境の整備		
8 安全・安心な園づくりの推進	9 地域や家庭と連携した教育環境の整備	
<p>学校は、こどもの安全を守る環境の整備を進めるとともに、安全教育（生活・交通・防災など）に取り組んでいると思いますか。</p>	<p>学校は、地域や家庭の人と協力して、授業や行事などの教育活動を進めていると思いますか。</p>	<p>R6では、地域・家庭との連携が前年比で20%近く伸びるなど大きな成果を上げた。R7においても、安全教育や地域連携への肯定的評価は極めて高い水準を維持している。防犯パトロール等の地域と一体となった安全確保体制の構築はできているが、放課後の下校指導など通学路の安全確保における地域との継続的な協力的体制の維持と、社会の変化に対応した新しい安全教育の在り方を模索していく必要がある。</p>

(4) こどものいのちと権利の擁護		
10 こどもの最善の利益を守る環境づくり		
<p>学校は、こどもの意見を反映させ、こどもの権利を守るとともに、こどもや保護者が相談しやすい学校づくりに取り組んでいると思いますか。</p>		<p>R6では、相談のしやすさ等の項目で教職員と児童の評価に30%もの開きがあり、教職員と児童の意識の乖離が課題であったが、R7では児童の肯定的評価が80%台後半まで伸び、評価の乖離が縮小している。全学年での「こどもの権利条約」の意義等の学習の実施や相談体制の再構築は成果として挙げられるが、こどもが相談したいタイミングで相談できる場と時間の確保等、常にこどもの最善の利益を優先する組織対応力の強化を図っていく。</p>

独自項目		
やさしく	かしこく	
<p>子どもは、言葉を中心に、思いやりをもってお友達を大切にすることができたとおもいますか。</p>	<p>子どもは、自分の考えを持ち、粘り強く（丁寧にあきらめず）学習に取り組むことができたと思いますか。</p>	
		<p>「やさしく」の項目は三者ともに90%近い高い評価を得ており、児童間の尊重し合う態度の育成に成果が見られた。一方、「かしこく」と「たくましく」については、肯定的評価が80%前後にとどまり、児童・保護者の評価に慎重な意見が見られた。目指す児童像の意識化は図られたが、学習への粘り強さや高学年としての自覚を、児童自身の自己肯定感や成長実感にいかにつなげていくかを求めていく必要がある。</p>

たくましく		
<p>子どもは、きまりを守り、下級生（お友達）のお手本になれるように生活することができたとおもいますか。</p>		

来年度の具体的な取組について

- 「個別最適な学び」の更なる具現化：ICTをドリル等の習得学習だけでなく、児童が自ら学習方法や課題を選択・決定できる授業場面の意図的な設定を推進する。
- 「相談しやすい学校づくり」の深化：アンケートや面談だけでなく、こどもが相談したい教員を自ら選べる体制の柔軟な運用等、組織的な早期対応を徹底する。
- 地域参画の意識を高めた「総合的な学習」への移行：地域の方々とワークショップや交流をさらに拡充し、児童が地域の良さを伝え、課題解決に貢献していると実感できる活動を位置づけていく。
- 「こどもの権利」の日常化：「こどもの権利条約」の学習を一過性のものにならず、校則の見直しや学級会活動などを通じて、こどもの意見を学校運営に反映させる場を増やしていく。

小中学校関係者評価

- 考察にもあるように、こどもたちが「自身が選択して学習を進める」部分を大切にしていってほしい。
- こどもたちのこれからの長い人生につながるように、小学校のうちに、「よいこと」「悪いこと」の見極めがつく力をつけてほしい。
- 学年が上がるにつれて、こどもたちの発表の力がついていて驚いた。基礎・基本が応用・活用につながるように、聞き手を意識した発表の機会を増やしてほしい。
- こどもたちの興味・関心に応じてグループで分かれて学びを深めるような学習を、今後も続け、さらに進めてほしい。
- 地域の高齢化も進んでいるので、「オレンジリボン」の学びなども総合的な学習や学級活動で進めてほしい。